

# 法華寺旧境内の調査

## —第430・435・442次

### 1 第430次調査

#### はじめに

本調査は、集合住宅建設にともなう事前調査である。調査地は、現法華寺の北側に隣接する（図175）。これまで調査地の周辺の法華寺域では、法華寺境内で第128-20・363次調査、西側の隣接地で第79-15次調査、北側で第141-3次調査がおこなわれており、掘立柱の柱穴などが検出されている。

調査は、当初南北6m、東西11mのL字型の調査区を設定して開始した。調査中、調査区中央で仏具などの遺物を多量に含む土坑（SK9240）を検出し、その広がりの確認と遺物の採集のため、SK9240部分を南北に拡張した。調査面積は約60m<sup>2</sup>、調査期間は2008年1月7日～25日である。

#### 基本層序と検出遺構

基本層序は、地表面より耕作土、暗褐色土（床土）、暗茶褐色土（近代包含層）、黄褐色土（遺構検出面・地山）となる。地表面から地山直上までは、深さ約35cm。

SB9245 調査区東半に位置する掘立柱建物。柱穴3基を検出した。建物の北西隅部分で、桁行2間以上、梁行2間以上。柱間は約3m（10尺）等間。柱穴掘方の平面は隅丸方形で、一辺1.0～1.3m。北東の1基は直径約30cmの柱根が残存する。

SK9240 調査区の中央西寄りで検出した土坑。東西約



図174 第430次調査全景（北西から）

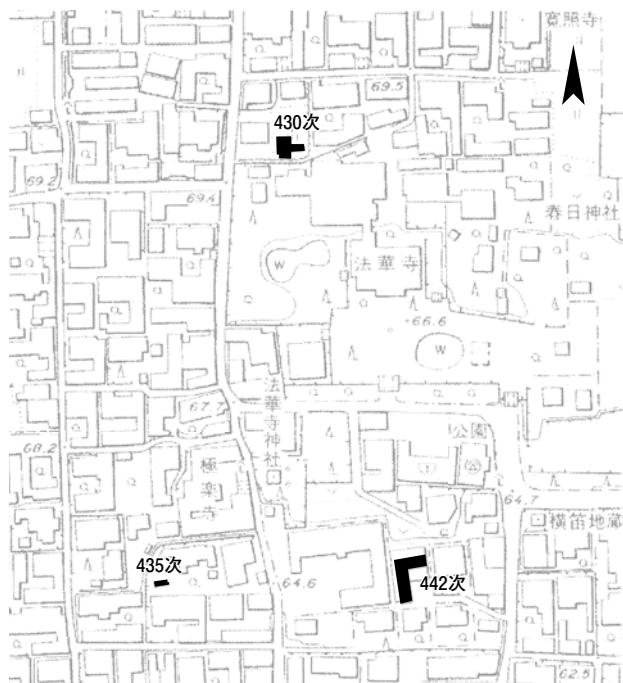


図175 第430・435・442次調査区位置図 1:3000

4.2m、南北7.3mを検出。南は近代の土坑SK9247で破壊されており、当初の平面形状は不明。深さ約30cm。土坑は2段掘りで、上段は北にいくほど浅くなり、調査区の北端では削平されほとんど残存しない。下段は南北に細長い楕円形で、底は凹凸があり平坦ではない。埋土は暗茶褐色粘質土で、土器・瓦などの遺物と炭片を多量に含む。特に土器は状態の良いものが多く含まれていることから、不要品を一括で投棄したごみ捨て穴のようなものと考えられる。

SB9241 SK9240の埋土を除去した底で検出した掘立柱建物。柱穴2基を検出した。柱間は約3m（10尺）。西側の柱穴は長辺0.75mの楕円形で、人頭大の礎盤石2石を残す。東側の柱穴は一辺1.0mの隅丸方形で、柱や礎盤石は抜き取られていた。

SX9242・9243 SX9242はSB9245の西で検出した掘立柱の柱穴。掘方は隅丸方形で一辺1.0m。直径0.3mの明瞭な抜取痕跡が残る。SX9243は、SK9240の底で検出した柱穴。掘方は隅丸方形で一辺0.85m。SX9242と並ぶ位置にあるが、柱穴の様相が異なり、柱間も約4.4mと広く、一連の遺構である可能性は低い。

SA9244 調査区西辺で検出した掘立柱の柱穴列。柱穴2基を確認した。柱間は約3.3m（11尺）。掘方の平面はいずれも隅丸方形である。

（大林 潤）

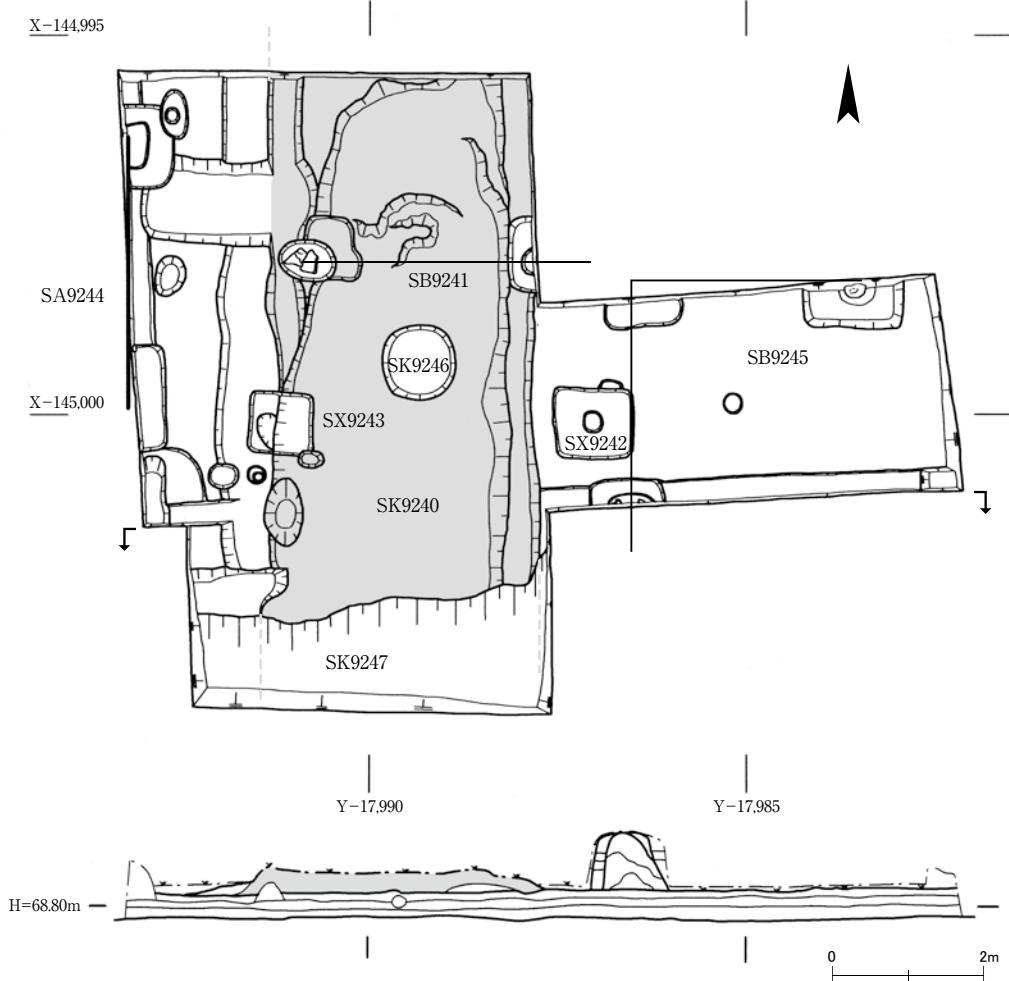


図 176 第 430 次調査遺構平面図・断面図 1:100

#### 出土遺物

**土器・土製品** 出土した土器類の総量は、整理箱で 96 箱分ある。少量の円筒埴輪などもあるが、古代の土師器・須恵器が中心である。そのうち SK9240 出土のものが 91 箱を占めている（図 177）。

SK9240 出土土器の内訳は土師器 66 箱、須恵器 25 箱で、平城宮 V のまとめをもつ土器群である。土師器・須恵器のほか、破片資料ではあるが少量の緑釉陶器を含んでいる。以下 SK9240 出土品を中心に概要を紹介する。

土師器の器種には杯 A・B・C、椀 A、皿 A・B、鉢、高杯、甕、カマドなどがある。

杯 A には A II (1・2)・A III (3) がある。1・2 は b0 手法。口径 17.2cm、器高 4.4cm と口径 17.0cm、器高 3.3cm。3 は b3 手法で口径 15.2cm、器高 4.0cm。2・3 は内面にハケ目をのこす。杯 B は蓋で B I (4) と B III

(5) を確認している。杯 B II (6・7) は b1 手法。口径 18.4cm、器高 4.9cm と口径 18.0cm、器高 5.2cm。8・9 は底部から口縁にかけて丸味をもつ器形で、皿 A II ないし杯 C。a0 手法と b0 手法である。椀 A は土師器供膳具のうち出土量が最も多く、主体となる器種。椀 A I (10~14) は外面を削った後、ミガキ調整をおこなう。口径 12.8cm~11.5cm で器高は 3.3cm~4.0cm。13 は底部にジグザグ状のミガキを施す。口縁部に灯明器として使用された痕跡を残すもの (12・13) も存在する。椀 A II の 15 は磨耗により調整が不明。口径 9.3cm、器高 3.2cm。

皿 A I (16) は口縁端部に凹線をもち、内側に肥厚する。b0 手法で底部外面は周縁部を 6 回に分けて削り、中央部は一方削りで調整する。口径 19.5cm、器高 2.8cm。皿 B I (17) は外反する口縁の内面に弱い凹線をもつもの。

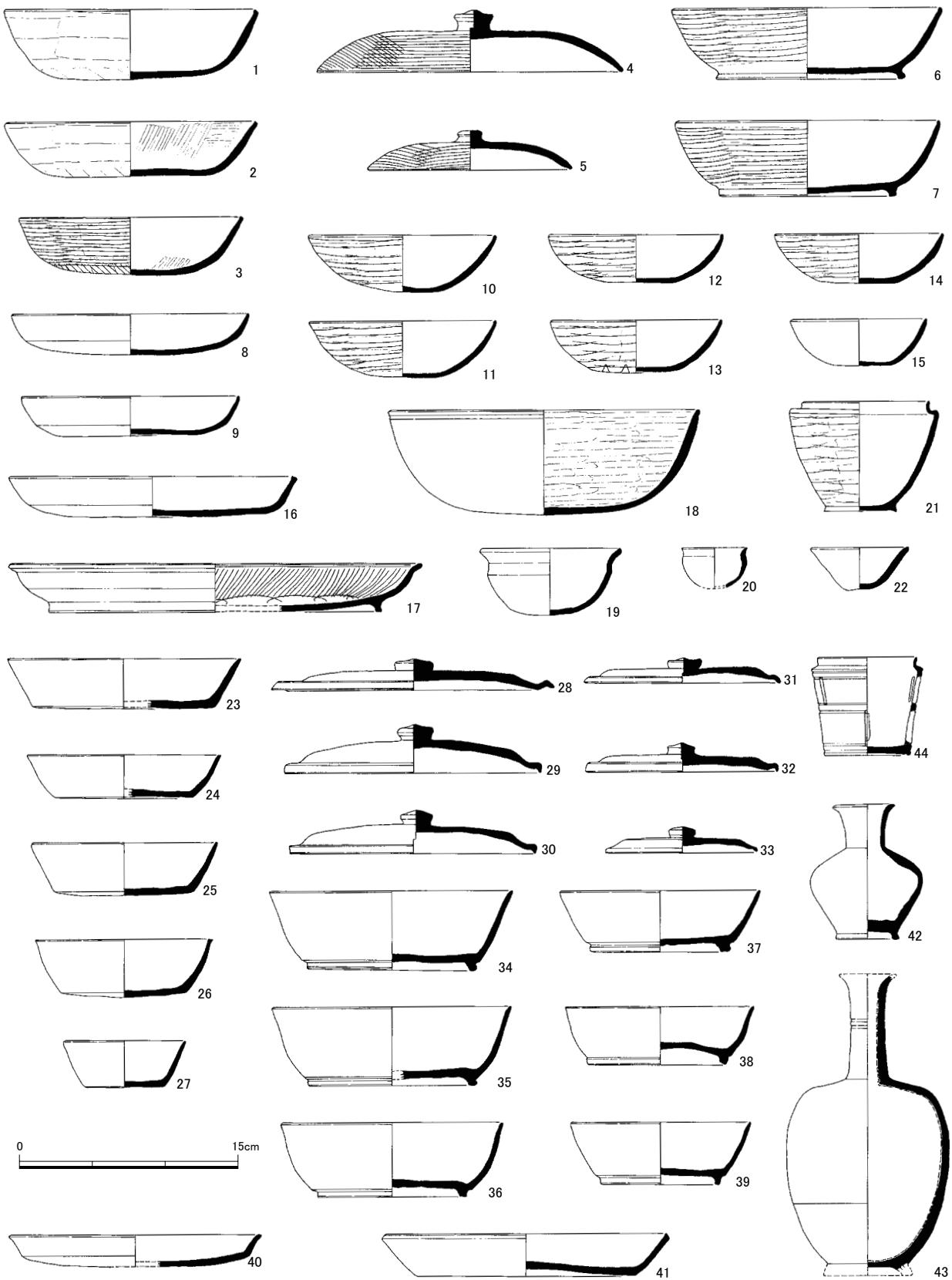


図 177 第 430 次調査出土土器 1:40

内面には放射1段暗文と連弧暗文を施しており、この土器群のなかでは古い要素をもっている。外面は口縁部の下半と底部を削る。口径28.2cm、器高3.3cm。鉢A(18)の口縁外面に1条沈線が横走するもの。内面は黒色で密なミガキ調整をする。口径21.1cm、器高7.2cm。壺Eは少量ながら一定量存在する。肩部の屈曲度や高台の形状にバリエーションがあり、技法や胎土にも違いが存在する。21は磨耗により不明瞭であるが、外面は削った後、ミガキ調整するものとみられる。

その他の器種では壺B(26)のほか、ミニチュア土器(20・21)も比較的目立つ。ここでは図示しなかったが、土師器では供膳具が主体であるものの、甕等の煮炊具も一定量を占めている。

須恵器には杯A・B、皿A・C、壺、水瓶、甕などがある。杯AはAⅡ・AⅢ・AⅣ・AⅤがある。AⅡ(23)は口径16.0cm、器高3.8cm。AⅢ(24・25)は口径13.2cm、器高3.0cmと口径12.8cm、器高3.7cm。AⅣ(26)は口径12.2cm、器高4.0cm。AⅤ(27)は口径8.4cm、器高3.2cmである。底部はいずれもヘラ切り後ナデ調整。暗灰色で外面に火櫻のある26はⅢ群、白色で軟質の25はⅣ群とみられる。

杯Bは須恵器供膳具のなかでは圧倒的に数が多い。蓋ではBⅠ(28)・BⅡ(29・30)・BⅢ(31・32)・BⅣ(33)を確認しているがBⅢが多く、BⅠは量が少ない。杯身ではBⅡ・BⅢ・BⅣを確認している。BⅡ(34~36)は口径16.7~15.1cm、器高5.4~5.1cm。BⅢ(37・38)は口径13.7cm、器高4.2cmと口径13.0cm、器高4.0cm。BⅣ(39)は口径12.3cm、器高4.3cm。杯身でもBⅢ・Ⅳの量が多いようである。底部外面の調整は、いずれもヘラ切り後ナデ。黒色粒が流れる28はⅡ群とみられる。皿AⅡ(40)は外反する口縁をもつもの。底部外面はヘラ切り後ナデ調整。灰白色で軟質な胎土でⅣ群土器とみられる。口径17.0cm、器高2.2cm。皿CⅠ(42)は直線的な口径をもつもの。口縁端部の面が外傾する。底部外面はヘラ切り後のナデ調整。灰白色で軟質な胎土でⅣ群土器とみられる。重ね焼きにより口縁部外面の端部付近のみ黒色を呈する。口径19.2cm、器高2.9cm。壺M(42)は水挽による成形とみられるもの。水瓶(43)は鉄釉を塗るもので暗赤褐色を呈する。頸部および肩部外面には緑色の自然釉がかかる。胴部下半はロクロ削り調整。色調等から東海地方の產品とみられる。

表24 第430次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			軒棧瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	型式	点数
6138	Ca	1	6664	H	1	江戸	1
6276	G	1	6702	D	1		
6284	?	1	6713	A	2	軒棧瓦計	1
巴(鎌倉)	1	6714	A	2			
巴(江戸)	2	6716	A	1			
型式不明	7	6721	E	1			
		7734	A	1		その他	
			江戸		2	釉付き平瓦	3
軒丸瓦計		13	軒平瓦計		11	その他計	
丸瓦		平瓦	磚		凝灰岩		
重量	81.3kg		305.2kg		1.6kg	1.1kg	
点数	718		3753		9	5	

44は近代土坑SK9247出土のもの。2条の細沈線が3単位で横走し、その間に4単位のスリットが上下2段で互い違いに穿たれる。底部直上に接合痕が認められ、円筒状の体部と円盤状につくった底部を接合したとみられる。色調は黒味がかった燻し銀で、東海地方の產品とみられる。形態からして、有蓋の香炉であろうか。

須恵器では、供膳具が主体を占め、甕等の貯蔵に関する器種は僅少であった。緑釉陶器では、仏具との関わりがある淨瓶・華瓶等の破片資料を確認しているが、やはり僧との関わりのある鉄鉢形の須恵器鉢Aは確認できなかった。

(加藤雅士)

木製品・金属製品 木製品は主に近代土坑SK9246より出土した。子供用と思われる、長さ14cm、幅5.5cmの下駄、漆塗りの椀などが出土した。また、SK9240下層からは、木製匙の破片も出土している。

金属製品は、すべてSK9240から出土した。方頭の鉄釘、鉄鎌、鉄片などが確認されている。また、破片ながら佐波理の椀や、用途不明の佐波理金具などが出土した。

(城倉正祥)

### おわりに

今回の調査では、多量の遺物を含む土坑SK9240のほか、掘立柱の柱穴を多数検出した。このうちSB9245は、建物の西北隅部分と考えられる。法華寺境内の建物については、これまでの調査で現本堂周辺に東西3棟、南北2列の、合計6棟の尼房とみられる東西棟建物が並立していたことが判明しているが、SB9245の西側柱列は、この建物群の西側建物の西妻柱筋を北に延長した位置にある。柱径はこれらの建物群と比較して小振りであるが、法華寺旧境内の北側の建物配置を推測する手がかりとなるだろう。

(大林)

## 2 第435次調査

個人住宅の建設にともなう調査で、2008年6月16日に調査を開始し、6月17日に終了した。調査区は東西5m、南北2mで、一部拡張をおこない、調査面積は11m<sup>2</sup>であった。

現地表下約20cmで旧耕作土上面に達した。耕作土は厚さ約20cmで、その下厚さ約5cmの床土直下が地山の遺構面となる。地山は礫混黄褐色土の層が約20cmあり、その下は灰白砂質土となる。

発掘区の東端で、東に落ちる落ち込みSX9310を検出した(図178)。落ち込みは2段からなり、西肩から東西幅30cm程度が、遺構面からの深さ30cm程度のテラス状となり、その東はさらに落ち込み、遺構面から約50cmの深さとなっている。南北溝である可能性のもと、発掘区の南東部で溝東肩の検出を目的とした拡張をおこなったが、拡張部分においては落ち込みの底がほぼ水平となっていた。この落ち込みが南北溝の西肩で、拡張部分が溝底であれば、溝幅は3m程度であったと推測される。落ち込み内からは、主として奈良時代の丸瓦・平瓦が出土し、最上層の埋土からは鎌倉期の平瓦が出土した。

この落ち込みが南北溝の西肩であれば、その位置から、東二坊坊間大路東側溝の可能性も考えられる。ただし、既往の調査では、法華寺旧境内の北の坪(左京一条二坊十坪:194-12次調査)で、東二坊坊間大路東側溝(幅約5m、深さ約1m)が検出されているが、法華寺旧境内と平城宮の間においては、東二坊坊間大路東側溝推定位置が何度か調査されているにもかかわらず、明確な遺構は確認されていない。今回検出した落ち込みが条坊に関わる遺構である可能性もあるが、現状ではその判断は難しい。

(島田敏男)

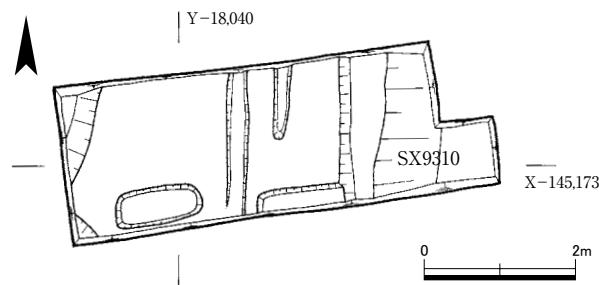


図178 第435次調査遺構平面図 1:100

## 3 第442次調査

はじめに この調査は法華寺町内における家屋新築工事に伴う事前調査である。調査地は現法華寺本堂の真南約110mにあり、第82-6次、第98-21次、第234-3・15次調査等で検出した推定金堂跡の南約30mに位置する。東隣の第242-6次および本敷地内の旧宅建設時の第98-4次で数時期の柱穴を検出している。調査地は金堂跡と同じ平坦面上にあり、調査はそれらと関連する遺構の確認を目的として、一部が第98-4次調査区と重複する幅4m、南北17m、東西12mの逆L字形の調査区を設定し、調査の進展に併せて一部拡張した。調査面積は101m<sup>2</sup>、期間は2008年9月1日～9月25日である。

層序 調査区内は表土下10～15cmで黄褐色粘土、黄褐色細砂質土の互層からなる地山が広がる。地山は西南端近くで暗灰褐色礫混り砂土と交替し、部分的に地山の上に茶灰色微砂質土の古墳時代遺物を含む厚さ数cmの薄層が残る部分がある。遺構はいずれも地山面で検出した。検出遺構 検出した遺構の主なものには、掘立柱建物2棟、掘立柱塀1条、铸造土坑1基、池状土坑、土坑などがある(図179)。

建物SB9205 大型柱穴2基を検出。東西2間以上、南北2間以上の東西棟建物の北側柱列と推定される。東の柱穴は一辺1.4m、深さ1.5mの方形掘方で、下部0.4m程は幅狭い段掘りとなる。掘方埋土は黄褐色粘土、暗灰色砂質土などの細かな互層をなす。上端径0.5mの柱抜取穴が伴う。西の柱穴は一辺1.2m、深さ1.5mの掘方で、東南隅の柱抜取穴は浅い楕円形で、底までの約1mについて柱痕跡状の円形を呈する。桁行柱間11尺(3.3m)。SA9215の南12尺(3.6m)に位置する。

建物SB9210 東西4間以上、南北2間の東西棟建物。第98-4次調査で検出した柱穴を東妻柱とする。桁行梁行とも10尺(3.0m)等間。一辺0.7～0.8m、深さ0.9mの柱掘方は柱筋方向に長く、埋土最上層に0.2m大の石塊を用いるものがある。柱痕跡は直径0.2m。

掘立柱塀SA9215 SB9210の南側柱の南10尺で検出した2基の柱穴で、西の柱穴は後の池状土坑SK9124に壊されているが、東の柱穴は一辺0.8m、深さ0.8mの掘方埋土最上層に瓦片を用いている。柱筋に揃うことからSB9210の廂柱列の可能性がある。

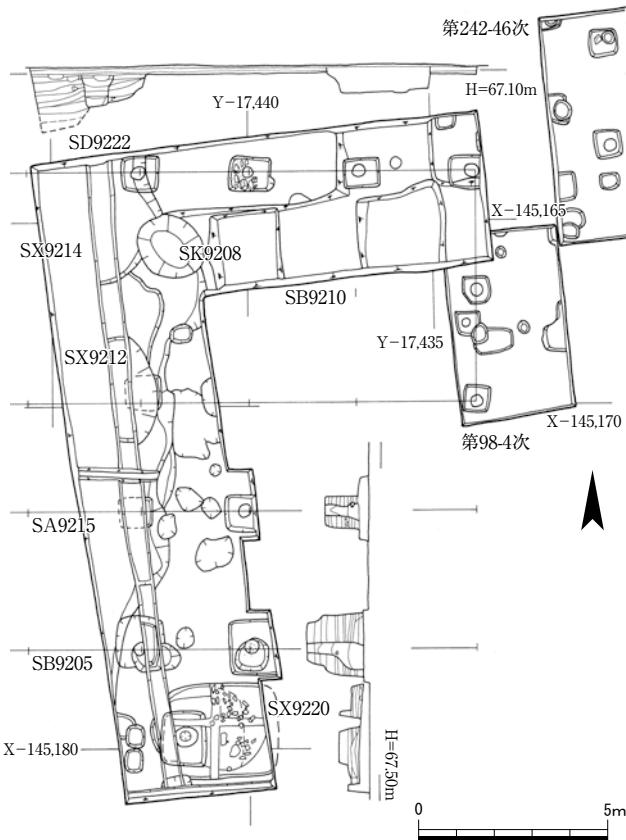


図 179 第 442 次調査遺構平面図 1:200

铸造土坑SX9220 調査区南端の方形土坑で、上下2段からなる（図180・182）。下段は南北1.5m、東西1.3m、深さ0.4m。薄い炭層がはり付く底面の中央に、直径52cm、深さ3cmの黄褐色粘土が詰まった円形凹みがあり、さらにその底面中央に直径25cmの円形凹みがある。上段は南北2.5m、東西3.3mで、西半は深さ0.3m、東に向かって浅くなる。土坑上段の北壁沿いに幅0.2mの浅い溝状の赤変面があり、東半埋土下層に鋳型片、東北部の上層に炉壁塊や鉄片が大量に散乱し、南壁際からは銅釘片1点が出土した。土坑はその構造から鉄製品の铸造に関わるとみられる。下段中央の52cmの円形が鋳型最下段のジョウにあたり、内外の炭層は中子、外型の乾燥時のものと理解され、出土した鋳型には円弧に対して鈍角に開く外型や丸みを帯びた平底の中子があることから、製品は口径50cm弱の鉄釜であろう。下段に据えた鋳型へ上段の上に

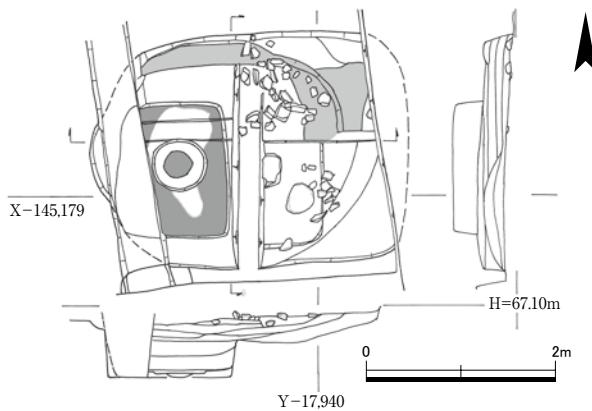


図 180 鋳造土坑 SX9220 平面図・断面図 1:80



図 181 第 442 次調査区全景（北西から）

据えた炉で溶解した鉄を流しこみ、東へ転がして鋳型をはずし、傾斜面を利用して運び出した後、甑炉を解体投棄したとみられる。下段埋土に瓦や土器の小片が含まれるが時期の特定は難しい。

池状土坑SX9214は茶褐色粘質土と砂質土の互層で埋まる。深さ0.6mで底は平坦。瓦片と少量の近世陶器が出土した。土坑SK9208はSX9214の縁辺に掘られた円形擂鉢状の土坑。南北小溝SD9222は直立する壁を持つ深い溝で近現代に掘られたもの。緑釉磚などが出土した。おわりに 調査の結果、推定金堂跡の南30mで掘立柱建物、掘立柱塀を検出した。法華寺旧境内は奈良時代初期の藤原不比等邸と伝領としての光明皇后宮、皇后宮を寺にした天平17年以降の法華寺の遺構が重複して存在するとみられ、今回確認した建物等の帰属が課題の1つとなる。今回、東西棟建物と判明したSB9210は推定金堂跡の南側柱の南90尺に北側柱があり、金堂の中軸線は建物の5間目中央を通るなど、法華寺の配置規格と合致する。しかし、皇后宮を寺に改めた経緯からみて、同一規格にあることだけでは所属時期を確定できない。掘立柱塀SA9215はSB9210の南廂柱列の可能性があり、その柱掘方に瓦片が含まれる点では法華寺以降ともみられるが、特異な配置になる難点がある。建物SB9205については桁行11尺で大型の掘方をもち、金堂前面の平坦地の南端近くに位置する点を考慮すれば、南面回廊の一部とみることも可能である。铸造土坑を含めて、時期・性格の確定は周辺地での調査を待って検討したい。（西口壽生）



図 182 鋳造土坑 SX9220（西から）